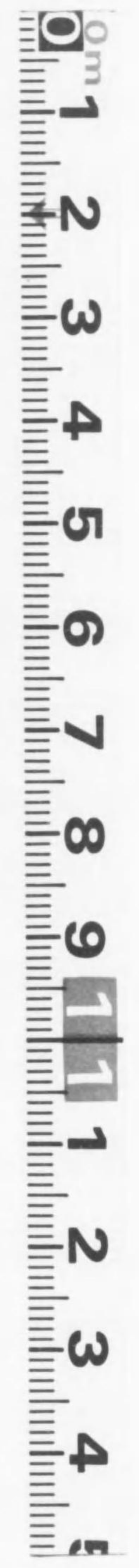


特277  
727

特277-727  
\*76W10666\*



始







子

厚

一

卷





## 序

私の記憶するところでは、民謡や小唄が詩壇的に不遇の時代が永かつた。しかし、詩壇はいつまでも詩壇人の詩壇でなく大衆の詩壇でなくてはならない時が来た。

民謡や小唄は大衆の詩である。高踏的な作風のみが詩の境地で

76W10666





なく、大衆の動き、時の流れの中に、無盡の詩境がある。

純情は、淡々として水の如きものである、民謡や小唄は純情のとほほしりである。純情を愛する人は民謡や小唄の愛護者で、大衆の動き、時の流れを知る人である。

著 者

## 目 次

|            |    |
|------------|----|
| 波浮の港       | 一  |
| 速戸の芽刈り唄    | 七  |
| 上州小唄       | 一〇 |
| ヤツチキ・バツタン節 | 一六 |
| 香住漁歌       | 二八 |
| 甲州音頭       | 三三 |
| 須坂小唄       | 四三 |



|          |       |    |
|----------|-------|----|
| 日田小唄     | ..... | 一五 |
| 港をどり     | ..... | 一四 |
| 犬山音頭     | ..... | 一八 |
| 鎮西小唄     | ..... | 一六 |
| 岡崎小唄     | ..... | 一七 |
| 當世平凡節    | ..... | 一三 |
| ガツタンシヨぶし | ..... | 一八 |
| 美濃の關の唄   | ..... | 一八 |
| 今立小唄     | ..... | 一三 |
| 岡崎一口唄    | ..... | 一七 |

|       |       |    |
|-------|-------|----|
| 笠岡一口唄 | ..... | 一〇 |
| 伊奈波音頭 | ..... | 一〇 |
| 信濃ぶし  | ..... | 一〇 |
| 笠松小唄  | ..... | 一三 |
| 十二橋   | ..... | 一三 |
| 銀座の月  | ..... | 一三 |
| 大函小函  | ..... | 一〇 |
| 仙酔島   | ..... | 一三 |
| 高原風   | ..... | 一三 |
| 風は南風  | ..... | 一三 |



|        |     |
|--------|-----|
| 奥町機場唄  | 一四二 |
| 因幡夕焼   | 一四五 |
| 磯原小唄   | 一四七 |
| 別府温泉小唄 | 一五一 |
| 竹が鼻小唄  | 一五六 |
| 笠松機場唄  | 一五八 |
| 秩父三峰   | 一六三 |
| 津島小唄   | 一六四 |
| 岩手小唄   | 一六六 |
| 旅の民謡   | 一六八 |

|         |     |
|---------|-----|
| 富士の白雪   | 一七二 |
| 黒猫さん    | 一七三 |
| 旅人の唄    | 一七九 |
| 青いすすき   | 一八三 |
| 五時に起きるを | 一八六 |
| 土投げ唄    | 一九一 |
| 藤の花     | 一九六 |
| 山越え     | 二〇〇 |
| 小松の蔭    | 二〇四 |
| 武蔵野に立ちて | 二〇九 |



目次 終

|      |     |
|------|-----|
| 夢の芽  | 三〇九 |
| 簀鷲   | 三一  |
| 長濱節  | 三四  |
| 紅屋の娘 | 三五  |

波浮の港

磯の鵜の烏ヤ

日暮れに歸る

波浮の港にや

夕焼け小焼け



明日あすの日和は

ヤレ ホンニサ 凧たこるやら

船もせかれりや

出船の仕度

島の娘達なつめヤ

御神火みかみ暮くし

なじよな心で

ヤレ ホンニサ ゐるのやら

島で暮らすにや



とほしうてならぬ

伊豆の伊東とは

郵便だより

下田港とは

ヤレ ホンニサ 風だより。

風はしほかぜ

御神火おろし

島の娘達ヤ

出船のときにや



船のともづな

ヤレ ホンニサ 泣いて解く。

### 速戸の芽刈り唄

(速戸の芽刈りは門司名物、年中行事の一なり。)

門司の名物 速戸の芽刈り

刈れば刈るほど芽がのびる

刈らなきやのびない

捨てときな



捨てておかりよか 速戸の芽刈り  
刈りにやのびない 葉も出ない  
のびなきや刈られぬ  
わしや歸へる

刈りに来たのか 眺めに来たか

刈らず眺めて歸るのか  
のびたらそのときや  
刈りに来る



上州小唄

赤城山から 風が吹き出して  
風で蝶々が とばされる

さアさ 妙義の山ほととぎす  
朝の草刈る 目をさませ

ホラ ギツチヨン ギツチヨン チョン〜

榛名山から 雲が脚出して  
またも伊香保に 雨ふらす

さアさ 前橋高崎までも  
ゴロリピカリと 雨が来る

ホラ ギツチヨン ギツチヨン チョン〜



利根の河原の 一本蓬もといも

流れくゝて 花咲いた

さアさ 上州は花咲くところ

河原蓬も 花が咲く

ホラ ギツチヨン ギツチヨン チヨンく

桐生伊勢崎 空の月ヤ霽れた

機場夜さりの 月となる

さアさ 機場は生糸がたより

糸は蠶の 繭だより

ホラ ギツチヨン ギツチヨン チヨンく

湧いて流れる 草津の湯さへ



別れ惜しさに 霧となる

さアさ 山越え谷川越えて

四萬<sup>しま</sup>は浮世の外にある

ホラ ギツチヨン ギツチヨン チヨンく

天道さま出て この世を照らす

新田高山 國照らす

さアさ上州は音にもひびけ

男伊達なら 負<sup>ひび</sup>とらぬ

ホラ ギツチヨン ギツチヨン チヨンく



ヤツチキ・バツタン節

一

芥子の種から

芽が出て伸びた

ヤツチキ・バツタンシヨ

しなり、くなりと

夜晝してて

ヤツチキ・バツタンシヨ

蝶々迷はす

花咲いた



二

胸の炎が

口からもれて

ヤツチキ・バツタンシヨ

手の甲うで手のひらぢや

かくすことア出来ぬ

ヤツチキ・バツタンシヨ

鼻の先から

火が燃えた。

三

見なせ お医者さん



おら家の馬は

ヤツチキ・バツタンシヨ

驅けてあるいて

茨を踏んだ

ヤツチキ・バツタンシヨ

脚に茨の

刺さした。

四

蚯蚓よく聞け

おけらも聞きな

ヤツチキ・バツタンシヨ



馬も食<sup>た</sup>べない

おたふく豆も

ヤツチキ・バツタンシヨ

莢がはぢけりや

皆はねる。

五

土を掘つくり返し

かつくり返ししてゐる

ヤツチキ・バツタンシヨ

前の畑に

田鼠<sup>もぐら</sup>アゐるに



ヤツチキ・バツタンシヨ

今日も朝から

日が當る。

六

雁ガが啼くから

出て空見たら

ヤツチキ・バツタンシヨ

毛など落して

空ゆく雁は

ヤツチキ・バツタンシヨ



どこの田甫へ  
寝るのやら

七

鳴子引いたら  
雀か逃げた

ヤツチキ・バツタンシヨ

逃げた雀が

後<sup>か</sup>ふり向いて

ヤツチキ・バツタンシヨ

天道さまなら

明日<sup>あす</sup>おいで。



香住漁歌

香住は但馬海岸の漁濱として知らる

但馬香住の

ドンド チヤツくチヤ

磯鳥よ

沖のクリ場へ

ドンド チヤツくチヤ

行つてみぬか

沖のクリ場は

ドンド チヤツくチヤ

大漁でヨ



小<sup>ニ</sup>鳥<sup>イ</sup>賊<sup>カ</sup>撰<sup>リ</sup>撰<sup>リ</sup>

ドンド チヤツくチヤ

皆投けた

クリ場大漁ちや

ドンド チヤツくチヤ

米値があがろヨ

米があがろと

ドンド チヤツくチヤ

磯鳥よ

濱が日和で



ドンド チヤツくチヤ  
風さへつづきや

女子供にや

ドンド チヤツくチヤ

苦勞アかけぬヨ。

### 甲州音頭

富士は東に アリヤ 御嶽みは西に

音頭とるなら まんなか中に

ヨイトナ ヤレヨイトナ

音頭とるなら まんなか中に

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ



ヤーレ スツチヨン スツチヨン チヨン

杉になるなら アリヤ 御嶽みはしらの杉に

御嶽みはしら三柱さんしゅうの 守り杉に

ヨイトナ ヤレヨイトナ

御嶽三柱の 守り杉に

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ

ヤーレ スツチヨン スツチヨン チヨン

鷺の羽ばたき 唯ひと息に

越せや猫坂 瀧の坂

ヨイトナ ヤレヨイトナ

越せや猫坂 瀧の坂

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ



ヤーレ スツチヨン スツチヨン チヨン

山が寒うなりや アリヤ どの木の蔭で

雉<sup>キ</sup>子<sup>ジ</sup>のめん鳥ヤ 寝るのやら

ヨイトナ ヤレヨイトナ

雉子のめん鳥ヤ 寝るのやら

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ

ヤーレ スツチヨン スツチヨン チヨン

甲州姉さま アリヤ 聞いたか見たか

葡萄にや仇花 咲きやしない

ヨイトナ ヤレヨイトナ

葡萄にや仇花 咲きやしない

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ



ヤーレ スツチヨン スツチヨンチヨン

最早<sup>もはや</sup>や火祭り アリヤ もう山じまひ

お富士やこれから 獨りほち

ヨイトナ ヤレヨイトナ

お富士ヤこれから ひとりほち

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ

ヤーレ スツチヨン スツチヨンチヨン

千鳥や差出の アリヤ 磯でも啼くが

妾や泣れぬ 袖時雨

ヨイトナ ヤレヨイトナ

妾や泣かれぬ 袖時雨

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ



ヤーレ スツチヨン スツチヨンチヨン

富士は五つの アリヤ 鏡の湖うみに

朝な夕なの 薄化粧

ヨイトナ ヤレヨイトナ

朝な夕なの 薄化粧

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ

ヤーレ スツチヨン スツチヨンチヨン

船頭行くかや アリヤ 富士川下り

唄で流すよ 十八里

ヨイトナ ヤレヨイトナ

唄で流すよ 十八里

スツチヨコ スツチヨン スツチヨンナ



ヤーレ スツチヨン スツチヨンチヨン

須坂小唄

山の上から、チヨイと出たお月  
誰を待つのか、待たれるか

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ。



誰れも待たない、待たれもしない  
可愛いお前に、逢ひたさに。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ

可愛い私は、須坂の町に  
須坂戀しか、あのお月。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ

お月や工場を、チヨイと來てのぞく



誰に思ひを、かけたやら。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ

誰れに思ひを、友達衆よ

ホロロホロロと、夜が更ける。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ

ホロロホロロと、須坂の町の

寝すの番やら、あのお月。

ヤ、カッタカタノタ



ソリヤ、カッタカタノタ

お月ア姿は、むらくもまかせ

糸はその日の、わ杵まかせ。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ。

糸は艶もつ、皆さんたちよ  
わたしや姿も、まだわかい。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ



須坂よいとこ、須坂の町の  
工場見せたや、この繁昌。

ヤ、カッタカタノタ

ソリヤ、カッタカタノタ

日田小唄

○

茶の芽ア伸びるし

鮎ア瀬に

のぼる

茶摘み女も



もう來やう

○

茶摘みしまへば

鮎ア瀬を

くだる

早瀬眺めて

袖しほる

〔註〕 大分縣日田郡は野生茶の産地なり。



港をどり

港をどりはヨ 港をどりはエ

後放樂をどり ヤットサノサ

時にや帯まで 空そらとける ヤットサノサ

ハ、ドンゲデモ コンゲデモ ヤットサノサ

新潟港のヨ 新潟港のエ

あやめの花よ ヤットサノサ

夏が来たのに まだかいな ヤットサノサ

ハ、ドンゲデモ コンゲデモ ヤットサノサ

信濃川さへヨ 信濃川さへエ

萬代橋アかかる ヤットサノサ



かけてかからぬ 橋はない ヤットサノサ

ハ、ドンゲデモ コンゲデモ ヤットサノサ

わしが思ふたらヨ わしが思ふたらエ

松が崎ア曇つた ヤットサノサ

佐渡の出船も 雨となる ヤットサノサ

ハ、ドンゲデモ コンゲデモ ヤットサノサ

ザクリザクリのヨ ザクリザクリのエ

砂山の砂も ヤットサノサ

夜は夜露で おもくなる ヤットサノサ

ハ、ドンゲデモ コンゲデモ ヤットサノサ

〔註〕 港をどりは新潟港の地方唄として作る



犬山音頭

一

名古屋へ来たなら、寄つてみな  
ながくはとめない　すぐかへす

『尾張犬山は　櫻の名所　アラセ  
春にや櫻の　コラサ　花ざかり』

二

櫻ばかりが花ぢやない

十七八なら花ぢやぞえ

『尾張犬山へ十七八を　アラセ

ちよいと眺めに　コラサ　来ておくれ』



三

十七八なら花ざかり

鶺鴒舟の篝火よがらびヤ燃えざかり

『尾張犬山の鶺鴒舟の篝火よがらび アラセ

逸はなる早瀬の コラサ 鶺鴒よがらをてらす』

四

てらさりやお前はどうかなさる

照らさにや鶺鴒よがらでさへしよけかへる

『尾張犬山をわすれてなるか アラセ

日本ラインの コラサ あるところ』

五

秋の月ならさえわたる



私の心もさえわたる

『尾張犬山で見せたいものは アラセ  
日本ラインと コラサ 秋の月。』

62

六

お月さまさへ寝りやさえる  
かうなりやわたしも身がさえる

『尾張犬山の秋の月やさえる アラセ  
誰とお月さま コラサ 寝たのやら。』

七

淡雪や降つてもすぐとける  
とけても淡雪やふりたがる

『尾張犬山へ犬山の町へ アラセ

63



雪も来て寝ちや コラサ 皆とける。』

八

雪見にきたとは親切な

寒けりや寒いで情もます

『尾張犬山で木曾川さへも アラセ

川の名が出る コラサ 名がひびく。』

〔註〕 犬山は愛知縣木曾川畔にあり



鎮西小唄

見せてやりたや北九州を、ヨイコラシヨく  
山にや石炭町には工場  
港々にやヨイコラ、シヨイく、ヨイコラシヨ  
船がつくヨイコラシヨ、ヨイコラシヨ

出来ることなら彦山さまよ、ヨイコラシヨく  
女ひでりの續くよな風を  
男泣かせにヨイコラ、シヨイく、ヨイコラシヨ  
わしやたのむヨイコラシヨ、ヨイコラシヨ

工場地帯の北九州は、ヨイコラシヨく  
夜さへ明けければ男の國よ



鐵のひびきにヨイコラ、シヨイくヨイコラシヨ  
夜もあけるヨイコラシヨ、ヨイコラシヨ

八幡貯水池ア大地の水よ、ヨイコラシヨく  
雨が千日百日降ろと

増しもしなければやヨイコラ、シヨイくヨイコラシヨ  
涸れもせぬヨイコラシヨ、ヨイコラシヨ

バナナ畑の風でも吹くか、ヨイコラシヨく  
椰子の葉に降る雨でも来たか

山にや緑の、ヨイコラ、シヨイくヨイコラシヨ  
霧が立つ、ヨイコラシヨ、ヨイコラシヨ

九州九州と北九州を、ヨイコラシヨく



生れ故郷でもあるかのやうに  
誰がゐるやらヨイコラ、シヨイ〜ヨイコラシヨ  
戀しがるヨイコラシヨ、ヨイコラシヨ

### 岡崎小唄

可愛がれなら 可愛がる  
通りがかりにや 寄りやしやんせ

私ヤ三州岡崎生れ  
惚れりや命も的にふる



裸身はだかみになれなら なりもする  
通りがかりにや 寄りやさんせ  
ふればふります 命いのちも的に  
なればなります 鬼おにに蛇へびに

〔註〕この歌詞は、古歌謡「岡崎五萬石」の補作なり

### 當世平凡節

女の唄へる

一

浮氣うきで 薄情うすじやうで  
嘘うそつきで ヨイトよいとくナ



わたしに苦勞を  
かけたがる アラ マ 平凡ね

二

朝寢で 寝ほうで  
ものくさで ヨイトくナ

わたしを 裸はだか身に

させたがる アラ マ 平凡ネ

三

りん氣で 無性で  
酒呑みで ヨイトくナ

わたしに 仕事を  
させたがる アラ マ 平凡ネ



四

邪けんで 短氣で  
愚圖々々て ヨイトくナ

わたしに 愛想を  
つかさせる アラ マ 平凡ホ

男の唄へる

一

おしやれで 見えほで  
出しやばりで ヨイトくナ

わたしに 苦勞も  
ないもんだ アラ マ 平凡ネ



二

おでこで 近眼ちかめで

鼻はなびくで ヨイトナくナ

わたしを 裸身はだかみも

ないもんだ アラ マ 平凡へいふたネ

三

とんまで のろまで

おしやべりで ヨイトくナ

わたしに 仕事しごとも

ないもんだ アラ マ 平凡へいふたネ

四

天狗てんぐで おきやんで



ヒステリーで ヨイト／＼ナ

わたしに 愛想も

ないもんだ アラ マ 平凡ネ

ガツタンシヨぶし

一

東京新橋 横濱間を

明治五年に 鐵道が出来て

ガツタンシヨ

名さへはじめはナー 陸蒸汽ヨ



ガツタンシヨ　ガツタンシヨ

二

昔々箱根は　天下の難路

大井川には　輦臺渡し

ガツタンシヨ

今は樂々ナリ　寢臺車ヨ

ガツタンシヨ　ガツタンシヨ

三

交通發達　文化は進む

大正昭和と　時代は變り

ガツタンシヨ

汽車の線路もナリ　二萬キロヨ



ガツタンシヨ

ガツタンシヨ

四

長い旅には 急行列車

名所古蹟を 窓から眺め

ガツタンシヨ

ちよいとつかれりやナー 食堂車ヨ

ガツタンシヨ

ガツタンシヨ

五

欧州旅行は 國際列車

通し切符で 西比利亞經由

ガツタンシヨ

二週間目にやナー 巴里へ著くヨ



ガツタンシヨ

ガツタンシヨ

六

雪の降る夜も 眞夏の晝も

貨物列車は 荷物を積んで

ガツタンシヨ

時間たがはずナー 輸送するヨ

ガツタンシヨ

ガツタンシヨ

七

交通機關は 文化の華よ

丑の刻には 草木もねるが

ガツタンシヨ

汽車の汽笛にやナー 休みやないヨ



ガツタンシヨ ガツタンシヨ

### 美濃の關の唄

この唄は美濃國關町の土地唄として書いたもので一名『美濃の關節』とも稱した

關と言ふたとて關所もないに  
なんのかんのと来てくれぬ

くる氣か來ぬ氣か言つてみな



言ひよによつては ドーンと

来いと言ふなら寝すにも行くが  
怖い人目の關がある

鬼でも棲むよなと言ふて  
その手でだまさばドーンと

人目怖けりや暗夜において  
關も暗夜はたんとある

暗夜になつてもツンともない  
かうなりや 押しかけ ドーンと



今立小唄

三里山は、福井縣今立郡の平野中にあり  
周圍三里と稱する。山麓に十數の農村あ  
り

三里山から(ヤンレ)

笛吹きながら

スツチャン、スツチャン

スツチャン、チャン、ト

鳶ア蜚寝に(ヤンレ)

呼びに来る

スツチャン、スツチャン

スツチャン、チャン、ト

山で笛吹く(ヤンレ)



鳶の鳥と

スツチヤン、スツチヤン

スツチヤン、チャス、ト

山で晝寝が(ヤンレ)

してみたい

スツチヤン、スツチヤン

山で鳶と(ヤンレ)

晝寝をしたりや

スツチヤン、スツチヤン

スツチヤン、チャン、ト

スツチヤン、チャン、ト



とうと薯芋（ヤシレ）

夢に見た

スツチヤン、スツチヤン

スツチヤン、チヤン、ト

岡崎一口唄

やんれ 岡崎の

娘さん

わしとゆかぬか



鎌もつて

あの山陰へ

草刈に

草を枕に

やつとさのさ

草がしをれる

やつとさのさ

茨がとめたら

どうなさる



おや、岡崎の  
娘さん

そのときや茨と  
やつとさのさ

### 笠岡一口唄

笠岡は瀬戸内海に面した岡山縣の古邑である。

こゝは笠岡

笠借りませうか

雨がふるから



笠貸しなさい

笠もないのに

借せくと

おや、さうかいな

鞆で借りませうか  
仙酔島を

これが貸さりよか  
この島を

おや、さうかいな



伊奈波音頭

岐阜の伊奈波神社は、五穀の守護神として名高し。この音頭は、五穀豊穡祈願の踊り歌として作る。

一

岐阜の伊奈波さま

五穀の護り

五穀みのれよ

世は穩に

二

五穀みのれば

お百姓繁昌

雨もうるほせ

彌日やみも照らせ



三

里の後生樂

五穀が大事

五穀波うて

穂に穂もなびけ

四

雨が片降りや

日が出て照らせ

早魃ヒツつづかば

雨雲おこせ

五

今年や世がよい

家棟ヤの上で

岐阜の伊奈波さま



この里さと護る。

信濃ぶし

信濃善光寺さんに

常夜燈がついてヨ

いつが日暮れで

夜明けやら

イヤ、ミスズトセ



右に御嶽

左に浅間ヨ

ともに善光寺さんの

眺めぐさ

イヤ、ミスズトセ

靡く靡かぬも

川中島のヨ

葦の尾花も

風次第

イヤ、ミスズトセ。

日本アルプス



谷間の雪はヨ  
夏も知らずに  
冬となる

イヤ、ミスズトセ。

雪の信濃も  
長野の雪はヨ

わしが思ふたら  
すぐとける

イヤ、ミスズトセ。

飯綱戸隠

どの山見てもヨ  
思ひ返せの



木は立たぬ

イヤ、ミスズトセ

權堂花街

極樂なれやヨ

女まぢりの

風も吹く

薬師様でも

ぶらんど薬師ヨ

岩に根が生え

根が伸びる

イヤ、ミスズトセ

イヤ、ミスズトセ



虎が庵いほりは

貞女のかがみヨ一

石に涙の

雨も降る

イヤ、ミスズトセ

そばは更科

月なら田毎ヨ一

お國自漫ぢや

ないけれど

イヤ、ミスズトセ。

天龍川には



飛沫が絶えぬヨ  
木會にや木萱の  
根が絶えぬ

イヤ、ミヌズトセ。

笠松小唄

木會の御嶽から  
流れる水は

アノサ

しばし 笠松の  
岸に淀む



水の流れさへも  
笠松ア戀し

アノサ

別れ惜んで  
しばし淀む

別れ惜んでも  
笠松離りや

アノサ

まとも流れの  
水となる

二度と歸ろとて



歸れぬ身ぢやに

アノサ

風の便りでも

せめて頼む

〔註〕笠松は岐阜縣の古邑にて木曾川畔にあり

十二橋

ほんに潮來へ

おいでなら

佐原來栖に

お茶屋がござらう

姉さ召しませう



のう姉さ

花のかむろが

後朝あきの

雨は涙で

降るぞへのう

一夜かり寝の

手枕に

旅の妻あかたと

唄はれて

明日は恥かし、

のう姉さ

皐月照れく

菖蒲も植ゑよ

お女郎見ましよか



十六島は

雨の降るのに

花が咲く

〔註〕十二橋は潮來名所の一なり

銀座の月

銀座照る月ア

田舎も照らす

月と名がつきや

二つはないに



済まぬ氣がした  
十五夜さまよ

わしの眼の性か  
銀座で見たりや

麻の葉つばで  
こさへたやうに

丸いお月が  
三角に



大函小函

大函小函は、北海道大雪山の南麓。峽流  
美で名高い層雲峡の上流。河鹿の名所で  
ある。

大函おほい 小函こいの

河鹿の子さへ

岩にやせかれる

瀬にや流される

浮世なりやこそ

あきらめしやんせ

りん氣アせぬもの

戀アせまいもの。



仙 醉 島

どうせうきよぢや

仙<sup>せん</sup>醉<sup>すい</sup>島<sup>じま</sup>よ

かよてこよなら

かよひもするが

人の心と時計の針は

一びやう一びやうとうつりゆく



高原風

高原風は日光の連山一帯より吹きおろす  
寒風の稱なり

寒い筈だよ

高原たかはら風かぜヤ

馬の耳をで

凍てかへる

馬よ 寒かろ

高原風たかはらかぜヤ ササホイ

小雪交りで

吹きおろす

小雪こゆきヤチラク



上州は雪ぢや

可愛ヤ 機場も

もう雪ぢや

上州雪降りや

夜明けの星も ササホイ

白く白んで

冴えかへる



風は南風

鶴土も青島も

南の風よ

思ひ出すぞへ

片割月が

誰にこがれてか

朝から出てる

誰にこがれたか

わしや知らないが

風は南風

青島沖の

離れ磯にでも



こがれただろか

〔註〕青島は日向國にあり

### 奥町機場唄

奥町は愛知縣の機業地なり

一

おいで おいで おいで

この町へおいで

來たらつひでに



機織つておいで

住んで住みよい

暮して居よい

尾張奥町は

機場でござる

二

啼いた 啼いた 啼いた

また来て啼いた

軒端覗きに

ちよいと来た雀



今夜來よとて  
逢はれるものか

尾張奥町は  
月夜でござる

因幡夕焼

因幡夕やけ  
どの山見ても  
山にや  
木のない  
山ばかり



山にや

木はない

あの山あたりや

備前備後か

岡山か

磯原小唄

一

末の松並

東は海よ

吹いてくれるな



汐風よ

風に吹かれりや

松の葉さへも(オヤ)

こほれ松葉に

なつて落ちる

二

お色黒いは

磯原生れ

風に吹かれた

汐風に



啼いてくれるな

渚の千鳥(オヤ)

末の松並ア

風ざらし

〔註〕磯原町は茨城縣海岸の勝地なり。

### 別府温泉小唄

海地獄

海の中かと

思ふてゐたりや

別府海地獄

山の中



鶴見地獄

おさへきれない

わたしの胸は

ちやうど鶴見の

活地獄

八幡地獄

わたしや別府の

八幡地獄

ぶつりくと

日を暮らす

血の池地獄

とてもかなしや



血の池地獄

とてもこの世と

思はれぬ

坊主地獄

因果地獄を

見たけりやおいで

因果地獄は

坊主地獄



竹が鼻小唄

たんく竹が鼻

よいくよいとこ

飛んでゆきたや

翼欲しや

飛ぶに飛ばれず

片袖しほる

せめて雀の

翼欲しや

〔註〕 竹が鼻町は美濃の國にあり、佛佐吉の生源地なり。



笠松機場唄

一

言<sup>い</sup>ふた 言<sup>い</sup>ふた 言<sup>い</sup>ふた  
お母<sup>つか</sup>さんが言<sup>い</sup>ふた

美濃の笠松ア

住みよて居よい

同じゆくなら

美濃綺織りに

娘ゆけよと

よいこと言ふた



トンカ トンカ トンカ

機場で暮らしや

いつも心が

トンカ トンカ若い

昨夜夢見た  
機場の夢を

ゆこかお母さん

美濃織りに



秩父三峰

朝にや朝霧

夕にや

狭霧はなれ

秩父三峰ア

霧の中

霧にまかれりや

三峰みつみねさまも

霧にまかれた

ままで

寝る



津島小唄

津島津島と

日の暮れごろはよ

風も津島へ

吹きたがる

風に吹かれりや

草木でもなびくに

袖に吹く風

吹いて来る

〔註〕愛知縣津島町は昔より美女多しと傳へらる



岩手小唄

岩手片富士

あの山蔭で

なじよな心で あねこよ

暮すやら

あねこ思ひば

あの山蔭の

雪もおほろに あねこよ

とけぬかや

〔註〕 あねこは方言、若き女のこと



旅の民謡

芒ア穂に立つ

裾野は秋よ

富士は今年も

山仕舞

(富士の裾野にて)

×

山にや霧立つ

霧ア雲となる

雲も重なりや

雨となる

×

帯のはばほど



なかるがあるが

吉田上宿

よいところ

(富士吉田口にて)

×

伊豆の下賀茂

千尋の海の

底で沸く湯が

ふいて出る

(伊豆下賀茂温泉にて)



富士の白雪

富士の白雪

お日和つづき

一つ眺めて

見ませうかな

簾でなくのは

簾鶯か

春の日永を

簾でなく



富士の白雪

いつとけるやら

一つ眺めて

見ませうかな

174

黒猫さん

夢が氣になる

お月さま

黄色いお月の

出る晩にや

175



黒猫さんでも

来るやうに

うつそり、ほんのり

出しておくれ

三角お月が

黄色なら

三角お月が

出しておくれ

黒猫さんさへ



きてくれりや

夜つびて夜とほし

まちあかす。

旅人の唄

山は高いし

野はただ廣し

一人とほく

旅路の長さ



かわくひまなく

涙は落ちて

戀しきものは

故郷の空よ

今日も夕陽ゆづりひの

落ちゆくさきは

どこの國やら

滯とどさへ知れず

水の流れよ

浮寝の鳥よ

遠い故郷の

戀しき空よ



明日も夕陽の  
落ちゆくさきは  
何處の國かよ  
涯さへ知れず

青いすすき

青いすすきに  
螢の虫は  
夜の細道、夜の細道  
通て來る

細いすすきの



姿が可愛ネ

細い姿に

こがれた螢ネ

夏の短い

夜は明けやすい

夜明頃まで、夜明頃まで  
通て来る



五時に起きるを

五時に起きるを

六時に起きて

ドッコイ／＼シヨ

それが辛抱なら

辛抱する

ハア、ドッコイ／＼シヨ。

辛抱する氣で

今日までゐるだが

ドッコイ／＼シヨ